株式会社東北新社メディアサービス

2023年度　第4回番組審議会議事録

1. 開催年月日　　：　2024 年　3 月　6　日　（水）

2. 開催形式　　：　書面開催

3. 委員の参加　　：　参加委員数　7 名　／　委員総数　7 名
　書面提出者　　：　瀬戸純一委員長、関沢英彦委員、天城靱彦委員、中浩正委員、
　　酒井順子委員、服部洋之委員、森川雅博委員

4. 審議対象チャンネル：　Super! drama TV HD

5. 議題　　：　番組審議
　＜審議対象番組＞
　・「発見！ファミリー・ルーツ（2011）／　WHO DO YOU THINK YOU ARE Season2 “GWYNETH PALTROW”」【字幕版】
　・「ウォーカー　シーズン 2」 第 1 話 【字幕版】

6. 審議内容

＜「発見！ファミリー・ルーツ（2011）／　WHO DO YOU THINK YOU ARE Season2 “GWYNETH PALTROW”」【字幕版】について＞

・NHK の「ファミリーヒストリー」は、この番組をまねたものと思われる。が、こちらの方が取材が綿密でよりすぐれている。最後も上手くおさめられていて、後味がよい。

・戸籍ではない身分登録の国アメリカでどのように先祖をたどっていくのか、興味深く見た。本人が旅をする構成であるのがいい。空間の旅であり、時間の旅でもあって、その中で、本人が発見をし、変わっていく過程が楽しめた。

・NHK の「ファミリーヒストリー」を思い起こしたが、ルーツが海外へも広がっていくところが、よりダイナミックである。旅番組の側面もあって楽しめた。調査が進むにつれ、主役であるグウィネスが祖先達の人生に同情や共感を覚え、2つの家系が持つ異なるピースを自分の中に感じ取っていく過程が、ドキュメンタリーならではの面白さだった。

・日本では NHK の「ファミリーヒストリー」で草刈正雄や柳葉敏郎のルーツが明らかになって話題だが、本作はイギリスから生まれアメリカに上陸した本家番組と言える。現地取材や歴史資料も綿密に描写され、そして何よりもグウィネス自身が現地の関係者に訊いていくことで、彼女の悲しみや喜びを視聴者も一緒に体現することが出来る構成になっているのが秀逸。勿論、人間はその時代背景に翻弄されてしまうが、“過去から学ぶことに意味がある”という最後の言葉が見る側に感動を与える良作といえるだろう。

・NHK に『ファミリーヒストリー』という番組がある。今回、似たようなコンセプト作品が審議対象となり、否応なく見ることになったが、出演者によっては実に魅力的作品になることを認識させられた。特筆されるのは、これらをパルトロウ自らが現地に行って調査していること。番組の成否、感動の度合いが、出演者、並びに調査結果によって大きく分かれ、当り外れが出てくることは、当然予想される。本編は 2011 年製作であり、この 10 年余の作品の中でも選りすぐりの自信作であるのだろう。とは

いえ、英国から、日本を含む各国に広がり、今なお出演希望者が後を絶たないというのだから、まだまだ賞味期限はあるのかも知れない。

・広く知られたレジェンド番組を初めて見る機会を得たのは嬉しいことだった。個人情報がデータベース化されて広くアクセスできるアメリカの仕組みを生かして祖先の足跡が明らかになることに改めて驚かされた。ただし番組の骨格は祖先の個人情報とその追跡を手助けする専門家の分析に限られていて、祖先の人生を彩る親戚や友人など関係者の証言や祖先の生活の様子を知る具体的な手がかりなどが少しでも伝えられれば、更に深く共鳴し感動することができたのではないかと思うと残念である。

・当該番組は英国が発祥の「発見！ファミリー・ルーツ」のアメリカハリウッドセレブ版であるが、日本人にとってはＮＨＫ「ファミリーヒストリー」の普及もあり、とっつきやすい番組であると言える。なにより目を引くのは、調査の主体である近代公共図書館や公文書館の先進性である。欧米では、こうしたリファレンスサービスが日常的に行われ、公共図書館は単なる本を貸し出すサービスだけではない、住民の課題解決支援がサービスの中心であることが浸透している。利用者の求めに応じて情報探索が自由にできることは現代社会の証といえる。競合となる配信サービスの台頭後、スーパー！ドラマTVが新しい試みとして、セレブを軸にしたノンフィクションを編成ラインナップに入れたことは評価に値し、かつ興味深い事と考える。ドラマに登場するセレブたちのタレント性は、身につけた演技力、才能そして努力によって形成されるが、元は「自分自身」であり自分を形作るアイデンティティ、その精神的ルーツを探る旅は、まるで推理小説の頁を繰るような味わいであった。

＜総括＞

英国が発祥の「発見！ファミリー・ルーツ」の米国版。日本でもその日本版「ファミリーヒストリー」(NHK)でお馴染みであり、親しみやすい番組と言える。さらに今回の審議対象作品の主役が、日本でも認知度が高いオスカー女優グウィネス・パルトロウであることも魅力アップにつながった。そうしたことから、高く評価する意見がほとんどだった。秀逸なのは、パルトロウ自身が、図書館や公文書館等で１９世紀の結婚証明書や乗船名簿、国勢調査などの各種記録を目にし、バルバドスなどの海外にも直接調査に出向いて現地関係者らに取材していく手法をとっていること。パルトロウの驚きや、喜び、悲しみを視聴者も一緒に受け止めることが出来る構成になっており、ドキュメンタリーならではの面白さ、楽しさが味わえた。「過去から学ぶことに意味がある」という最後の言葉が、見る側に共感を与える。それにしても驚嘆すべきは、調査の主体である米国の近代公共図書館や公文書館の先進性である。ある委員からは「欧米ではこうしたリファレンスサービスが日常的に行われ、住民の課題解決支援がサービスの中心であることが浸透している。日本ではいまだ『貸本屋』の域を脱していないが、本来の図書館サービスはこうあるべきなのである」との指摘があったが、考えなければならないテーマである。秀作ドラマの購入競争が激しくなり、ハードルが高くなっている昨今、新しい試みとして、こうしたノンフィクションを編成ラインナップに入れたことは評価に値する、との意見もあった。

＜「ウォーカー　シーズン２」 第１話 【字幕版】について＞

・シリーズの中途の評価は、状況もキャラも分からないのでむずかしい。登場人物の面構えや演技から推察するしかないが、これでは評価はむずかしい。もう少しとがったドラマを見たい。

・南部の広大な土地、大農園、名家と名家の隠された確執などを背景にした犯罪ドラマは、最初はとっつきにくい印象。少しずつ謎が解けると、興味は増していくとは思う。ただ、そこまで忍耐する日本の視聴者をどのくらい期待できるかは、いくらか心配でもある。

・シーズン１を見ていないので、ドラマに入っていくまでやや時間がかかった。テキサス・レンジャーという仕事が日本では馴染みが薄いため、ちょっとした解説があると、さらにわかりやすく、楽しめるの

ではないか。ウォーカーが、主役らしくないキャラクター設定であるところが興味深い。ドラマを見続けることによって、主人公の味わいも深まっていきそうなドラマである。

・犯罪アクションドラマのシーズン 2。現在のテキサス・レンジャーとしての活躍だけでなく、前作に引き続きの潜入捜査にも関わり、当然犯罪ドラマの展開をしながら、一方では隣人と過去の火事による確執が残っていて子供たちも巻き込むファミリードラマの一面も持つ。初回からいろいろな伏線が張り巡らされているが、激しいアクションシーンも散りばめられているのも見どころ。次の展開が気になる連続ドラマとして、万全の出だしだと思える。

・シーズン 1 の知識がなく、主演俳優や製作者の経歴などにも疎い身には、なかなか筋を追うのは難しかったが、二度三度と見ていくと、奥行きの深いドラマになっており、米国で大人気シリーズになっていることは、十分に頷ける。全体にいささか血なまぐさい犯罪サスペンスの様相を呈しながら、隣接する家同士の諍いや、恋模様、任官争いなどの家庭ドラマの要素もあり、それが深刻一辺倒ではなく、ユーモラスも交えて描かれているところが魅力の一つであろう。まだ腑に落ちないところ、脈絡のよく分からないところもあるが、両家の不仲の原因となった火事の真相、ウォーカーが狙われたらしい狙撃事件の真相など、謎は多く、引き続き最後まで見てみたいという気にさせてくれる作品だ。

・ロミオとジュリエットのような二つの家の因縁の対立を軸に、テキサス・レンジャーの世界の確執をダイナミックに描く魅力作。主人公が対峙する相手の全貌が少しずつ明らかになっていく過程の緊迫感に満ちたアクションシーンが魅力の最大のポイントだが、一方で様々な局面に顔を出す二つの家の因縁の対決が、ストーリーに深みを与えている。とはいえ、初回のせいか両家の対決が余りにも出来すぎていて興ざめに感じられる部分もあったように思う。それでも今後のストーリーが二つの家の対決がらみでどのように展開するのか大いに楽しみである。

・「WALKER」のシーズン 2 は全米では高評価であったと聞く。我々の年代にとっては、チャック・ノリスの「炎のテキサス・レンジャー」が印象強く残る中、リブート作品と言われる本作品であるが、十分に期待を持つことができた S2 の第一話といえる。もちろんドラマ制作や視聴習慣のトレンドの大いなる変化もあるが、スピード感と脚本の多層性は「炎のテキサス・レンジャー」の比ではない。仕事と家族、現在と過去の狭間にありながら、主役のジャレット・パタレッギの演技や表情、仕草が醸し出す、光と闇、陰と陽といった深みが、これからの物語が一筋ならではいかない印象をもたらす。単なるアクションに留まらない現代の課題を内包した興味深い作品といえる。

＜総括＞

海外ドラマファンに根強い人気を誇るジャレット・パタレッキが主演する、犯罪アクションドラマのシーズン２。テキサス・レンジャーとしての活躍だけでなく、前作に引き続きの潜入捜査にも関わり、犯罪ドラマの展開をしながら、一方では隣人と過去の火事による確執が残っていて子供たちも巻き込むファミリードラマの一面も持つ。委員の評価は分かれた。「初回からいろいろな伏線が張り巡らされているが、激しいアクションシーンも散りばめられているのも見どころ。次の展開が気になる連続ドラマとして、万全の出だしだと思える」「主人公を含めた個々の登場人物に感情移入させる物語があり、それらは極めて早いスピードで展開される。単なるアクションに留まらない現代の課題を内包した興味深い作品といえる」等々、高く評価する意見が聞かれた。だが一方で、「シーズン 1 を見ていない、あるいは知識がない視聴者にとっては、いささか馴染みにくい、筋を追うのに時間がかかる」と受け止める委員も複数いた。それでも「主人公は魅力的であり、散りばめられた数々の謎も気になるところで、最後まで見続けたい、という気にさせる作品」と期待を寄せる向きも。ただ、「そこまで忍耐する日本の視聴者をどのくらい期待できるかは心配であり、ちょっとした解説があると分かりやすく、楽しめるのではないか」との提言もあった。なお、ドラマの審査対象番組は、シーズン 1 の第 1 話にしてほしい、との意見があったことを付記しておきたい。

7. 委員退任・新任報告

・野田慶人委員長が退任し、新たに森川雅博委員が就任、瀬戸純一委員が委員長に就任したことを報告した。

＜事業者回答＞

今後の番組編成の参考にさせていただく。

以上

株式会社東北新社メディアサービス

2023年度 第5回番組審議会議事録

1. 開催年月日　　：　2024 年　3 月 26 日（火）　12:30～14:00

2. 開催場所　　：株式会社東北新社 会議室（東京都港区赤坂 4-8-10）

3. 委員の出席　　：委員総数 7名 ／ 出席委員数 4名
出席委員の氏名　：小池保 委員長、渡辺祥子 委員、渡辺純一 委員、藤森益弘 委員
欠席委員の氏名　：谷口恭子 委員、横山宗嘉 委員、明智恵子 委員

放送事業者側出席者氏名 ：
＜株式会社東北新社メディアサービス＞
漆原 弘子 代表取締役社長
＜AXN 株式会社 ザ･シネマ事業部＞
榎本 豊 ゼネラルマネージャー、小林 淳(事務局)

4. 審議対象チャンネル　：　ザ･シネマ HD

5. 議題　　：　番組審議
＜審議対象番組＞
・新録吹替 映画『ワイルド･スピード【4K レストア版】【ザ･シネマ新録版】』

6. 審議内容
・審議資料について、具体的にこういう意図でこういうふうなことをやって、こういうようなプレゼント・キャンペーンを行って、SNS ではこうだった、と幅広く報告が出されており、それだけ吹替企画というものに対する現場の思いがかなり一本化されてきた。これは良いと思う。
・アクションものは複雑なセリフが無く、吹き替えが必要だったのかどうか。
・視聴者の要望としてあった 1 作目をこのキャストで観たいというところに応える、ということなのではないか。そこがこれまでの企画とは違ってザ・シネマとして作り上げる、というものだったと思う。
・ザ・シネマで制作した吹替版の許認可、制作物の権利はスタジオが持っているのか。
→（榎本 GM より）権利元であるスタジオが保有している。
・制作にかなりコストがかかる分だけ、徹底的に PR していくべきである。
・吹き替えは若い人は特に公開時から吹き替えで観ており、「ながら観」ができるなどのメリットがある。
・洋画は字幕、という考え方や好みもあり、吹き替えのほうが情報量や解かり易さがあるという面もあるので両方の良さを生かしてほしい。
・今の時代は選択肢が多いほうが良い時代。やるならば新しい吹き替えの文化を創造するくらいの意気込みがあれば企画する意味もある。
・今回の新録吹き替えについては、（現在のキャストでの吹き替えとしては）欠損があったところにうまく目を付けて企画として成立していると考える。

＜事業者回答＞
・頂いたご意見を真摯に受け止め、今後の番組編成の参考にさせていただく。

7. 委員退任・新任報告
・田久保敏委員が退任し、新たに明智恵子委員が就任したことを報告した。

以上

株式会社東北新社メディアサービス

2023年度 第6回番組審議会議事録

1. 開催年月日　　：　2024 年　3 月 28 日（木）

2. 開催場所　　：　株式会社東北新社　会議室（東京都港区赤坂 4-8-10）

3. 委員の出席　　：　委員総数　7 名　／　出席委員数　6 名
出席委員　　：芥川麻実子委員長、中町綾子委員、中嶋貞治委員、岩佐陽一委員、武内智雄委員、村本理恵子委員
書面参加の委員　　：岩本昭治委員

放送事業者側出席者氏名　：
＜株式会社東北新社メディアサービス＞
倉元健児取締役

放送事業者側出席者氏名　：
＜株式会社ファミリー劇場＞（ファミリー劇場　HD）
柳田昌賢代表取締役社長、渡邊潔巳 GM、深谷幸司（書記）

4. 審議対象チャンネル：　ファミリー劇場　HD

5. 議題　　：　番組審議
＜審議対象番組＞
・「ＡＫＢ４８　ネ申テレビ　シーズン４１」拡大版ＳＰ

6. 審議内容
＜「ＡＫＢ４８　ネ申テレビ　シーズン４１」拡大版ＳＰについて＞
・シーズン４１まで積み上げてきた歴史というものに感慨深さを感じる。ファミリー劇場のフラッグシップ的番組といえるのではないか。
・全体としてさわやかな、元気のいい番組であり、楽しさを感じる。
・運動会という企画はテレビ番組としては王道であり、面白かった。
・番組の演出上、運動会の対抗戦というライバル関係が設定されているが、仲の良さというのが見えた。若い世代には対決姿勢を前面に出すよりも仲の良さが感じられる内容の方が受け入れやすいのでは。
・競技シーンでは出演者たちの一生懸命さ、オフショット的なシーンで等身大の姿が垣間見えた。
・世代間で評価が変わる番組だろう。
・もっと大胆に AKB４８を知らない人に対しても番組の視聴訴求をしても良いのではないか。出演者を詳しくは知らずに視聴したが、番組の企画は引き込まれる内容であった。
・誰が誰なのかわかるように大きくゼッケンをつけるなど、ファンではない方に向けて出演者を認知させる努力が必要。ファンではないため、視聴していて誰が誰だかわからなくなってしまった。

・ムチャぶりというところからスタートしている番組だと思うが、ムチャぶりというものに対して今後は抵抗感がでてくる人たちが出てくるのではないか。
・ファンにとっては一生懸命に頑張っているところが見られるのは良いだろう。ただ、ファンではない者からすると 96 分は長く感じた。
・企画よりもキャストが柱になってしまっている。一般向けの番組とはいえないのでは。
・完全にＡＫＢファン向けの番組になっており、視聴してみようとするハードルが高くなりすぎている。
・ＡＫＢ４８を知ったのはファミリー劇場のネ申テレビがきっかけだった。その当時に出演していた人たちはグループにはもういないが、ネ申テレビ初期のエピソードを視聴できる環境を整えてはどうか。

＜番組編成に関しての意見交換＞
・多様性の時代である。アイドル、声優ジャンルのオリジナル番組が強い印象があるが別ジャンルを探ってみても良いのではないか。
・追随する必要はないが、海外のアイドル系バラエティの日本との違いを考えると、アイドルがオタク文化とつながっておらず、アンダーグラウンド感が少なめな印象である。
・制作者視点ではなく視聴者視点を忘れずに。自分たちが見たい番組は何なのかということを今一度立ち返ってほしい。
・新しいメディアからでてきたものでも、世間に広まるのはテレビからということがまだ多い。そういった意味でもテレビ以外のメディアにもアンテナを高くするべき。
・丁寧な番組作りというのは忘れないでいただきたい。

＜事業者回答＞
・今後の番組編成の参考にさせていただく。

以上